大戦期エリアーデにおける国家統合と国民の追悼の問題[1]

奥山　史亮

（和文要旨）

第一次世界大戦後のルーマニアは、戦勝国として、歴史や民族構成、経済状況が多様であった諸地域を新たな領土として獲得し、それら新領土を一つの Nation として統合するための文化的な基盤を形成することを課題とした。とりわけ、国家統合の過程において命を落とした戦死者に対して、ルーマニアの新たな国民として如何に語ることができるのかという問題は、大戦間期知識人に課せられた大きな問題であった。大戦間期のナショナリズムである軍団運動では、民族精神の復興と軍団運動の拡充のための自己犠牲として死を賛美する思想が浸透しており、ミルチャ・エリアーデはそのような軍団の思想に共感を示しながら「歴史の恐怖」を構想するための基盤を形成していった。第二次大戦後、フランスに亡命したエリアーデは、上記の Nation をめぐる言論を新たな国際秩序に沿うよう語り直すことを課題とした。その試みの痕跡を、ペッタッツォーニをはじめとするイタリア宗教史学、エヴォラとの関係性、IAHR の創設、エラノスへの参加をめぐる関連資料から読み取りながら、ナショナリズムをトランスナショナルなものへ転換したものとして宗教現象学の形成過程を把握したい。

（SUMMARY）

The work of Mircea Eliade cannot be understood without reference to the history of Romania, his homeland. After the First World War, Romania acquired new territories with diverse ethnic composition and economic conditions, necessitating the creation of a new cultural foundation to integrate these territories as one nation. In particular, the question of how to mourn the war dead in the process of national integration was a serious problem faced by intellectuals during the

[1] 本稿は、日本宗教学会第 81 回学術大会におけるパネル企画「宗教史の中の IAHR と宗教現象学」（代表：藤原聖子）、および宗教倫理学会第 23 回学術大会における研究発表に加筆修正を施したものである。

interwar period. The right-wing nationalists of the Mişcarea legionară, the Legionary Movement (also known as the Iron Guard), revered death as a form of self-sacrifice for the revival of the national spirit, and Mircea Eliade formed his own academic foundation while expressing sympathy with the ideas of the Mişcarea legionară. Eliade fled to France after the war and made it his task to recreate pre-war nationalist discourse in a way that would be in line with the new international order. In this paper, I examine letters Eliade exchanged with the Italian thinkers Raffaele Pettazzoni and Julius Evola, materials related to the establishment of the International Association for the History of Religions (IAHR), and Eliade's participation in Eranos, and I argue that his creation of the field of phenomenology of religion should be understood in terms of his attempt to transform nationalism into transnationalism.

１．問題の所在

本稿は、ミルチャ・エリアーデが大戦間期ルーマニアのナショナリズムに基づく言論を、第二次世界大戦後の国際秩序の変動に対応するために再構築していった過程を整理しながら、宗教現象学の形成、およびその学的性質に検討を加えるものである。

第一次世界大戦後のルーマニアは、戦勝国として、歴史や民族構成、経済状況が多様であった諸地域を新たな領土として獲得し、それら新領土を一つの Nation として統合するための文化的な基盤を形成することを課題とした。とりわけ、国家統合の過程において命を落とした戦死者に対して、ルーマニアの新たな国民として如何に語ることができるのかという問題は、大戦間期知識人に課せられた大きな問題であった。大戦間期ルーマニアのナショナリズムであった軍団運動[2]では、民族精神の復興と軍団運動の拡充のための自己犠牲として死を賛美する思想が浸透しており、以下で考察を加えるように、当時のエリアーデはそのような軍団の思想に共感を示しながら学的基盤を形成していったと考えられる。

第二次大戦後、フランスへの亡命期にエリアーデは、共産主義から民族精神を防衛するための言論を亡命者向けに展開しながらも、個別的な Nation を統合する新たな国際秩序、とりわけ IAHR[3]やユネスコなどに代表される国際組織に関与しながら宗教を普遍

[2] その名称は活動時期によってかわり、大天使ミカエル団、レジオナールや鉄衛団と呼ばれることもあるが、本稿では軍団運動の呼称を用いる。
[3] 国際宗教学宗教史学会（International Association for the History of Religions）は 1900 年

的な現象として叙述することに努めるようになっていった。エリアーデが自身の学問を宗教現象学と自認していなかったことは周知のとおりであるが、いわゆる宗教の普遍的叙述を志向した宗教現象学者として国際的な評価を得ていったのはこの亡命時代のことである。その一方で軍団運動において相識の間柄となっていたイタリアの思想家ユリウス・エヴォラとの関係性は、第二次世界大戦後、エリアーデが IAHR やエラノス会議に接近していったことに応じて緊張を帯びたものとなり、最終的に袂を分かつに至る。

上記の大戦間期から第二次大戦後に至る過程を整理すると、エリアーデが Nation のあり方を模索しながら、さらに Nation と宗教の連関について思索しながら、自身の学問を形成していったことがみえてくる。以下では、大戦間期の Nation をめぐるエリアーデの言論を確認してから、亡命後 IAHR をはじめとする国際組織の創設に関与しながら宗教の普遍的叙述を志向する学問、「宗教現象学」を形成していった過程を大戦間期ナショナリズムに対する反動という視点から考察する。そのことにより、宗教の普遍的叙述を目的とした第二次大戦後の学問とナショナリズムの関係性について一考を加えたい。

２．大戦期ルーマニアの国家形成とエリアーデのナショナリズム

（１）軍団運動の展開と特徴

1919 年 1 月から開催されたパリ講和会議において、戦勝国として参加したルーマニアはワラキア、モルダヴィア、トランシルヴァニア、マラムレシュ、ブコヴィナ、ベッサラビア等の地域を統合するに至った。上記の新領土は多様な歴史的背景を有しており、民族構成や経済発展も一様ではなかった。そのためヴェルサイユ体制下のルーマニアでは、これら諸地域を国家として統合することが課題となり、文化的に統合された国家を表象し得る民族的伝統を探求するナショナリズムが活発となった。エリアーデが関与した軍団運動も、学生を中心に拡大したナショナリズムのひとつであった。

軍団運動の展開[4]について詳述することは本稿の目的から外れるが、軍団運動は新領

にパリで第 1 回大会が開催され、第一次世界大戦開戦前の 1912 年までバーゼル、オックスフォード、ライデンにおいて 4 年おきに開催されてきた学会である。第二次世界大戦後、ユネスコの支援により、事務局を備えた国際学会として再編され、ファン・デル・レーウを初代会長として 1950 年にアムステルダム大会、1955 年、1958 年にはペッタッツォーニを会長としたローマ大会、および東京・京都大会、1960 年にはゲオ・ヴィデングレンを会長としたマールブルク大会が開催された。後述するように、エリアーデはこの IAHR の編成に大きく関わりながら、自らの学問を発表する場所を求めていったと考えられる。

[4] 軍団運動については、Keith Hitchins, Rumania 1866-1947, The Oxford History of Modern

土の統合によって増加した少数民族、とりわけユダヤ人から政治的権利を剥奪し、さらに軍部や政府機関からユダヤ人を排除して、ルーマニア人の国家を取り戻すことを訴える反ユダヤ主義的な主張をその特徴のひとつとしていた。そして、農村的共同体こそがルーマニア固有の伝統を保持してきた民族の核であると説き、農村の正教会と協働しながら支持を広げていった。1936 年 7 月 17 日にスペイン内戦が勃発し、同年 10 月にベルリン＝ローマ枢軸が結成されると、軍団運動の指導者コルネリュー・ゼーリャ・コドリャーヌは、反ソ、反ボリシェヴィキ、反ユダヤ主義の方針をより鮮明にし、枢軸側に立って民族とキリスト教文明を共産主義から防衛することを宣言した。そしてフランコを支持して義勇兵を派遣したが、1937 年 1 月に軍団創設以来の幹部であったイオン・モツァとヴァシレ・マリンがスペインにおいて戦死した。正教会の積極的な協力によりブカレストで執り行われたモツァとマリンの葬儀は、軍団のプロパガンダの絶好の機会となり、両者の死が民族精神の復興と軍団運動の拡充のための自己犠牲であったと賛美する思想が大々的に宣伝された。民族復興や国家再建のために自己を犠牲にすること、死を経ることにより精神を刷新し、新たな人間として再生すること、新たな人間を礎とした新たな国家を建設することなどが謳われた。

（2）軍団運動へのエリアーデの関与とユリウス・エヴォラとの邂逅

このような軍団運動に対してエリアーデが積極的に関与していたことは、近年の研究によって詳細に検討され、否定し難い事柄と考えられている[5]。1935 年に日刊紙『時代』

Europe, Oxford at the Clarendon Press, 1994. Mark Sedgwick, Against the *Modern World. Traditionalism and the Secret Intellectual History of the Twentieth Century*, Oxford University Press, 2004. Carol al II-lea, *În Zodia Satanei. Reflexiuni asupra politicii internaţionale*, Bucureşti, 1994. Zaharia Boilă, *Amintiri şi consideraţii asupra mişcarii legionare*, Cluj-Napoca, 2002. 藤嶋亮『国王カロル対大天使ミカエル軍団』彩流社、2012 年等を参照。

[5] 軍団運動とエリアーデの関係性については、近年の主な研究に限っても以下のものがあり、以降の分析において参照している。Horst Junginger (ed.) *The Study of Religion under the Impact of Fascism*, Brill, 2008. Moshe Idel, *Mirce Eliade, From Magic to Myth*, Peter Lang, 2014. Florin Turcanu, *Mircea Eliade, Le prisonnier de l' histoire*, La Découverte, 2003. Steven M. Wasserstrom, *Religion after Religion, Gershom Scholem, Mircea Eliade, and Henry Corbin at Eranos*, Princeton University, 1999. Leon Volovici, *Nationalist ideology and anti-Semitism. The case of Romanian intellectuals in the 1930s*, Oxford, 1991. Alexandra Laignel-Lavastine, *Cioran, Eliade, Ionesco. L'oubli du fascism*, Paris, Presses Universitaires de France, 2002. Andreji Oisteanu, *Mircea Eliade between political journalism and scholarly work*, Archaeus, 2004. Hannelore Müller, *Der frühe Mircea Eliade*, Lit Verlag Münster, 2004. Nicolae Babuts (ed.) *Mircea Eliade, Myth, Religion, and History*, Transaction Publishers, 2014.

（Vremea）に掲載したエリアーデの論説では、ルーマニアの Nation は西欧からその制度を取り入れた議会の政治的討議によって形成するのではなく、土着の精神性に基づいて形作るべきものであり、Nation を政治でなくもっぱら精神運動の問題として捉える必要性を説いている。さらにルーマニアのナショナリズムは西欧の政治的産物であるマルクシズムとデモクラシーによって阻害されているため、Nation の伝統を正確に伝えるための土着の学問が必要であり、その研究拠点を創設すべきことを訴えている[6]。さらにモツァとマリンの葬儀において宣伝された、ルーマニア民族を神のもとに導くための聖戦の犠牲として死を賛美する思想に対してもエリアーデは共感を示している。

これらの論説からは、ルーマニア固有の Nation の伝統を探求すると同時にそれを異種排外的な性質を有するものと捉える点において[7]、エリアーデが軍団運動に近い立場をとりながら、大ルーマニアの国家的統合を自身の取り組むべき課題として意識していたことが見て取れる。そして、このような軍団運動に同調したエリアーデの言論は、ユリウス・エヴォラのファシズムに思想的に接近するものになっていった。

周知のようにエヴォラは、アーネンエルベの創設運営にかかわったヴァルター・ヴュストの勧めにより、1937 年末から 38 年にかけてドイツ国内を講演のために巡っていた[8]。これらの講演では、共産主義やユダヤ人の唯物論による汚染から Nation を解放するために、古代のアーリア的精神を備えたエリート層の養成が必要であること、しかし神智学協会や従来のオカルティズムにはその実行能力が欠けていることなどを訴え、ヴュストからの強い共感を得たという。しかしナチスは、エヴォラの言論が精神性を過度に強調し、政治や文明を軽視していることを危険視し、国民社会主義の理念から逸脱するものと評価した。そのためエヴォラはドイツでの活動が困難になり、対ボルシェヴィキ戦線を東方に拡大することを目的にルーマニアを訪れて、コドリャーヌと対談するに至った。

ブカレスト市内で行われてエリアーデも同席したコドリャーヌとエヴォラの対談で

---

[6] Eliade, *Profetism Românesc 2*, Editura Roza Vînturilor, Bucureşti, 1990, pp. 79-82, pp. 127-129.

[7] ルーマニアの純粋な Nation を探求しようとするエリアーデの言論は 1920 年代から確認できる。例えば 1927 年 9 月～11 月に発表した連載記事「精神の旅程」は、西欧文明による抑圧からルーマニアの精神性を解放し、精神文化を再生する必要性があること、その精神性の源泉は正教会の mysticism のうちにあり、mysticism の活性化がルーマニア民族の再興につながるはずであるが、西欧から輸入されたブラヴァツキーによる神智学協会が不正確な mysticism を広めているため、ルーマニア本来の mysticism を探求することが急務であることを述べている。Eliade, *Profetism Românesc 1, Editura Roza Vînturilor*, Bucureşti, 1990.

[8] Horst Junginger (ed.), 2008.

は、互いの著作やファシズム、国民社会主義、民族問題などが話題となり、エヴォラはコドリャーヌの徹底した唯物論批判と反ユダヤ主義、民族精神を重視する思想のうちに「アーリア的伝統」を見出したという[9]。さらに、スペイン内戦におけるモツァとマリンの戦死を、唯物論に対する戦いにおいて、民族精神を新たに創造するための犠牲として認識し合った。犠牲を厭わず「聖戦」の強行を訴えるコドリャーヌの思想のうちに、エヴォラは自身の思想と共鳴するものを見出し、評価したと考えられる。

創造のための犠牲というテーマは、後述するように、以後のエリアーデが宗教現象学を構想する上で幾度も語りなおしていったものであり、大戦間期におけるモツァとマリンの死、そしてエヴォラとコドリャーヌとの対談がその構想の起点であった可能性が想定される[10]。

（3）サラザール体制下におけるエリアーデの言論

エヴォラとの対面ののち、1938 年 7 月 14 日にエリアーデは軍団運動のシンパとの疑惑により国家保安部によって逮捕され、ミエルクレアチェク収容所に送られた。そして 1940 年にナエ・イオネスクが没すると、ロンドンでの大使館勤務を経て、1941 年 1 月から在リスボンの大使館に文化参事官として着任することになった。このポルトガルでの滞在においてエリアーデは創造のための犠牲というテーマを、ルーマニア国内へのソ連侵攻による犠牲者を意識しながら、棟梁マノーレ伝説をはじめとするルーマニアの民間伝承を題材として論じることにより、自身の学問の中心に据えていくことになる。

エリアーデが大使館に着任した当時のポルトガルでは、アントニオ・デ・オリヴェイラ・サラザールを首相とする新国家体制の統治が実施されていた。周知のように新国家体制は、カトリック教会と軍部を掌握して労働運動や左派勢力を徹底的に弾圧する独裁制であり、「神、祖国、家族」をスローガンとして掲げていた。フランス革命以来の西欧型の民主主義や自由主義に依らず、カトリック教会をはじめとする民族的な宗教伝統の復興をすすめる新国家体制のうちに、エリアーデは、正教会と連携しながら西欧由来でないルーマニア固有の Nation を形成するためのモデルが見いだせると考えていた[11]。

---

[9] Corneliu Zelea Codreanu, *The Prison Notes*, Logik Förlag, 2015.

[10] モツァとマリンを追悼したエリアーデの記事 “Ion Moța şi Vasile Marin”, 1937 では、両者の死を、ルーマニア民族を神のもとに導くための正教会的な聖戦の犠牲であったと讃えている。Leon Volovici, 1991, pp. 83-84.

[11] 1942 年に刊行したエリアーデ『サラザールとポルトガルの革命』は、サラザールが政権を掌握するまでのポルトガルの歴史について、教会勢力に反対する自由主義者と、絶対主義王政

この時期のエリアーデの論説には、ルーマニアとポルトガルに通底する文化的基盤をラテン性（Latinity）と表現し、イスラムをはじめとする諸民族の侵攻によって多大な犠牲を出すことを強いられながらも豊かな文化を創造してきた両国に共通する歴史を強調し、さらに帝国の侵攻経路に位置するルーマニア民族が生み出した文化的所産を賛美するものが数多く認められる。たとえば大使館刊行の雑誌『活動』（*Acção*）の 149 号に掲載したエリアーデの論説「死に関するルーマニアの神話」は、第一次大戦で大量の戦死者を出したルーマニア北東部モルダヴィアの農村地域において行われた追悼の儀礼を紹介したものである[12]。それによれば、終戦後、故郷に帰ってきた死者の魂を、蝋燭を携えた農村民たちが村道の両脇に立ちながら迎え入れるという儀礼が行われた。この儀礼には正教会の祭司も参加していたが、教会がその実施を呼びかけたのではなく、死者を弔うために古来より伝わってきた儀礼が自然発生的に執り行われたのであるという。さらにエリアーデは、国家のための犠牲は愛国的な行為であるが、その政治的な意味でなく、死者が故郷の精神的共同体に再統合される瞬間に立ち会うという宗教的意味に着目する必要性を強調しており、そのような創造的な犠牲の精神は、ルーマニア人が棟梁マノーレ伝説[13]という民間伝承をとおして表現し、保持してきたものであると以下のように訴えている。

「棟梁マノーレ伝説」では、クルテア・デ・アルジェシュにおける修道院の建造が語られている。筆者は「棟梁マノーレ伝説」に関する研究において、ルーマニア民族は「犠

と連携する教会の対立に着目しながら叙述している。それによれば、新国家体制以前のポルトガルはフランス革命の理念を無批判に受け入れ、自由主義的な憲法を制定し、カトリック教会を政治から排除したことにより、民族としての伝統を喪失して内乱が勃発することになった。サラザールは、カトリシズムと民族の伝統を結びつけることにより国家的混乱を鎮め、「キリスト教的な革命を通しての救済」をもたらしたのだという。そしてこのような新国家体制の成功は、キリスト教徒であり、ラテン系であり、ヨーロッパ人であるルーマニアの人間にとっても、伝統や Nation を捉えなおす上で益するところが大きいと述べている。

12 Eliade, *Jurnalul portughez si alte scrieri*, 2, Humanitas, 2006, pp. 378-383.

13 「棟梁マノーレ伝説（Legenda Meşterului Manole）」とは、東欧地域一帯に流布した民間伝承詩であり、人身供犠を主題としている。それによれば、マノーレという名前の石工職人の棟梁が修道院を建造していた。その現場では、昼間つくったものが夜間に崩れてしまうため、作業を終えられないでいた。修道院を完成させるためには人身供犠が必要というお告げがあり、マノーレは石工職人たちと、翌日、昼食を最初にもってくる妻を生け贄に捧げることを決める。マノーレは自分の妻が一番先にやってこないようにさまざまな案をこうじるが、最初に到着したのは彼の妻であった。マノーレの妻を修道院の石壁に生き埋めにすることで夜間の崩壊がとまり、修道院が完成した。建造作業の終了後、マノーレは修道院の屋根から身を投げて死亡し、彼が落下した地点から泉が湧き出たという。エリアーデはこの伝承を主題とした『棟梁マノーレ伝説の注解』を 1943 年に発表している。

牲的死」という心性をもっており、それは創造的価値を有するものであると強調したことがあった。なにかを建造するためには、生命を犠牲としなければならない。修道院はほかの建造物と同じように、女性〔マノーレの妻〕が自らすすんでその命を捧げ土台とすることがなければ崩れ落ちてしまう。このような信仰はきわめて深い意味をもっている。すなわち、「無」から（ex nihilo）創造できるのは神のみであり、人間は自らの生命を捧げなければ、創作を成し遂げることができない。物質的な建造物や道徳は、「生命」を捧げることではじめて存続できるようになる。人間は造物主でないため、自分たちの生命を創造の手段としなければならない[14]。

周知のように、歴史によって強いられる苦難・犠牲の創造的意味を読み取ることは、『永遠会の神話』において「歴史の恐怖」に抗する営為として提示されるものである。エリアーデは、モツァとマリンの死をめぐる軍団運動の思想を踏まえながら、歴史的苦難・犠牲を Nation の支柱となる豊かな文化として受容してきたことがルーマニアの精神性であると捉えることにより、創造的な犠牲を神話や民間伝承の核と見做す宗教学を確立していったと考えられる。

３．第二次大戦後の国際秩序とナショナリズムの問題：IAHR 創設とエラノスへの参加

ポルトガルにおいて大ルーマニアの崩壊、妻ニーナとの死別を経験したエリアーデは、新たな国際秩序が形成されていくフランスで亡命者としての生活をおくることになった。このフランス亡命期では、大戦間期の Nation をめぐる言論を新たな国際秩序に沿うよう語り直すことが課題となり、エリアーデは IAHR やユネスコ、エラノス会議などの国際組織に積極的にかかわりながら宗教の普遍的叙述を試みるようになっていく。以下では、第二次世界大戦後の IAHR 創設をめぐる主要な資料であるラッファエーレ・ペッタッツォーニとの書簡、および IAHR やエラノス会議にかかわることで緊張を孕むに至ったエヴォラとの関係性を分析しながら、エリアーデが大戦間期ナショナリズムに基づく学問をどのようにつくりなおそうとしたのか辿りたい。

（1）エリアーデとペッタッツォーニの IAHR をめぐる書簡

エリアーデとペッタッツォーニは大戦間期から深い交友をもち、多くの書簡をかわし

[14] Eliade, 2006.

ていたが、第二次大戦後、ペッタッツォーニに宛てたエリアーデの最初の手紙は 1946 年 2 月 20 日付のものであり、パリの高等研究実習院で講義を担当している近状などを伝える内容であった[15]。同年 3 月 23 日付のエリアーデの書簡は、ペッタッツォーニの返信に対する感謝、ジョルジュ・デュメジルやインド学者ルイ・ルヌーと交流を持つようになったこと、ガリマールやパヨーの出版状況、ペッタッツォーニの著作のフランス語訳に関する相談などを伝えている。以降の書簡においてもエリアーデは、デュメジルとペッタッツォーニを仲介するなど、フランスの研究者や出版社を積極的に紹介している。

1948 年になると IAHR の構想に関する言及が確認できるようになる[16]。その構想が初めて話題となったのは 1948 年 4 月 21 日付のペッタッツォーニ宛て書簡であり、そこでは以下引用のように、国際東洋学会、言語学会、ビザンツ学会のパリにおける開催に言及しつつ、これらの会場で対面することができないかと訊ねながら、ユネスコからの助成を取り付けて国際宗教史学会を創設できないものかと相談を持ち掛けている。

国際東洋学会第 21 回大会が言語学会の直後、7 月 23 日から 31 日までパリで開催され　ます。5 月 31 日まで、入会申請を研究報告の題目および要旨と一緒にパリ 7 区リール通りまでお送りいただくことができます。会費は一千フランで、学会やレセプション、エクスカーションなどに参加希望の同伴者は五百フランです。国際ビザンツ学会第 6 回大会が同時期（7 月 27 日-8 月 2 日）にあります。申し上げるまでもございませんが、先生に直接お目にかかることができましたらなにより幸いです。と申しますのも、イタリアを訪れる機会がなかなか得られないのです。 この機会にユネスコからの支援の下で、国際宗教史学会の創設に着手できるのではないでしょうか。いかがお考えでしょうか[17]。

同年 5 月 19 日付の書簡では、高等研究実習院宗教学部門で教授をつとめていたアン

---

[15] Mircea Eliade, Raffaele Pettazzoni, *L'histoire des religions a-t-elle un sens? Correspondance 1926-1959*, Les editions du cerf, 1994, p. 130.
[16] IAHR 創設とエリアーデの関係については以下を参照。Eric J. Sharpe, Comparative *Religion. A History*, Duckworth, 2003.　Leonardo Ambasciano, *An Unnatural History of Religions: Academia, Post-Truth and The Quest for Scientific Knowledge*, Bloomsbury Academic, 2019. Giovanni Casadio, "NVMEN, Brill and the IAHR in Their Early Years: Glimpses at Three Parallel Stories from Italian Stance", in *NVEN, the Academic Study of Religion, and the IAHR Past, Present and Prospects*, Brill, 2015, pp. 303-348.
[17] Mircea Eliade, Raffaele Pettazzoni, 1994, pp. 179-180.

リ＝シャルル・ピュエシュから IAHR の構想に対する賛同を得られたこと、ヴィデングレン、レーウらに呼びかけて「発案委員会」を設置したいことなどをペッタッツォーニに伝えている。

国際宗教史学会に関する私たちの構想に関して、ピュエシュ氏は完全に賛同してくださいました。まもなく「委員会 Comite d'initiative」の設置に取りかかります。ヴィデングレン、ファン・デル・レーウ、そのほかの学者たちも第 2 回大会の際にはパリにやってきます。〔中略〕。

東洋学会のためにパリまでお越しいただくことは叶わないでしょうか。双方の学者たちが対面するのに最良の機会ですし、（ローマ？あるいはリスボン？！……での）国際宗教史学会の準備を整えることもできるのではないでしょうか[18]。

同年 9 月 9 日付のペッタッツォーニ宛て書簡では、スウェーデン政府からの助成、およびユネスコからの支援を得ることにより、学会を秋には立ち上げられるというヴィデングレンからの言葉を伝えている。さらに本書簡には学会誌に関する初めての言及があり、『国際宗教史学・民族学雑誌 *Revue international d'histoire des religions et d'ethnographie religieuse*』というタイトルを当初エリアーデが提案し、総合的な論文の掲載に重点をおくべきだと主張していたことがわかる[19]。これらの書簡以降においても、エリアーデは IAHR の創設運営や著作の刊行に関する相談を持ち掛けており、ペッタッツォーニとの関係性を積極的に深めていったことが読み取れる。

（2）第二次世界大戦後エヴォラとの関係性と IAHR およびエラノス会議への参加

一方、エヴォラとの第二次世界大戦後の関係性については、ペッタッツォーニの場合とは対照的に、エリアーデが自発的に動くことは少なくなった[20]。1949 年 8 月にエリアーデは、戦後初めてローマを訪問してペッタッツォーニやデ・マルティーノと対面して

---

18 Ibid., pp. 181-183.
19 Ibid., pp. 189-191.
20 両者の関係については以下を参照。Horst Junginger, 2008. Florin Turcanu, 2003. Virgil Ierunca, *Trecut-au anii… Fragmente de jurnal. Întâmpinări şi accente. Scrisori nepierdute*, Humanitas, 2000. Liviu Bordaş, "Inedited Letters of Julius Evola to Mircea Eliade, The difficult encounter in Rome", *International Journal on Humanistic Ideology*, IV, 2011, pp. 125-158. 書簡資料は *Mircea Eliade şi corespondeții săi*, vol. I, V. Julius Evola, Lettere a Mircea Eliade, 1930-1954, Controcorrente Edizioni, 2011 を参照。

いるが、その際、エヴォラはルネ・ゲノンからエリアーデの滞在住所を聞いて手紙を送ったがすれ違い、結局会うことができなかったことがゲノンとエヴォラの書簡に記されている[21]。1949 年 8 月 31 日付のペッタッツォーニ宛て書簡においては対面する約束をエリアーデが積極的に交わしているのに対し[22]、エヴォラに対しては連絡する積りがなかったことが考えられる。翌 50 年、IAHR アムステルダム大会に先立ち、エリアーデは再びローマを訪れ、ペッタッツォーニ、トゥッチ、デ・マルティーノ、ブレリヒ等との会談の機会を得た。ペッタッツォーニの招待によりローマ大学において、さらにトゥッチの依頼により中東亜研究所にて、翌年刊行することになるシャーマニズムに関する講演を行うことが目的であったが、この際にもエリアーデがエヴォラに連絡をした記録は確認できない。

1950 年 9 月 4～9 日に IAHR アムステルダム大会が開催され、エリアーデは「宇宙生成神話と呪術的治療 」（“Mythes cosmogoniques et guerisons magiques”）という演題の発表を行った。それは、宇宙創成神話の反復、始原への回帰があらゆるものの再生をもたらすこと、儀礼によって日常の生を断ち切り、死をむかえ、始原へと回帰することで新たな生が開始されるという神話論、儀礼論を主題とするものであり、ポリネシアやインド、チベット、北米の神話伝承、錬金術やシャーマニズム、フロイトの精神分析などを時代地域横断的に事例として取り上げながら論じたものであった。既述の通り、再生をもたらす死、創造的な犠牲というテーマは軍団運動のイデオロギーであり、戦中のエリアーデがルーマニアの Nation 的特性と見做していたものであった。アムステルダム大会は、エリアーデにとって、ルーマニアのナショナリズムにおいて構想してきたものを、時代地域横断的な事例を用いながら宗教現象学的に語り直すことで、トランス・ナショナルなものに組み替えようとした舞台であった可能性が想定される。

大戦間期ナショナリズムのうちで構想した主題を戦後の国際組織に向けて語り直すというエリアーデの試みは、アムステルダム大会に先立つ同年 8 月に開催されたエラノス会議での講演からも確認することができる。1950 年 8 月開催のエラノス会議において、エリアーデは「心理学と宗教史学－「中心」のシンボリズムについて」[23]という演

---

[21] Liviu Bordaş,2011.

[22] エリアーデは以下の様に書き送っている。「明日、ローマに向けて発ちます。マッサリ Massari 氏のところ、マルグッタ通り 90、電話番号 683481 に宿泊いたします。9 月 3 日の土曜日、夕方ころに先生をお尋ねしようと考えております。その日時で先生のご都合がつかないときには、ご連絡くださいますようお願い申し上げます」。Mircea Eliade, Raffaele Pettazzoni, 1994, p. 217.

[23] Eliade, “Psychologie et Histoire des Religions -- A propos du Symbolisme du "Centre"”,

題で初めての講演を行った。この講演では、深層心理学や精神分析の助けを借りながら宗教的象徴の意味を総合的に把握することが宗教史学の役割であり、そうすることにより近代世界が忘却してしまった古代の精神性に接近することが可能となり、文化的偏狭や歴史的状況に捉われている近現代人の精神を拡大して新しい人間を生み出すことができると説いていた。古来の精神性を復興し、精神の新たな領域を統合する精神的革命を起こして、新たな人間を生み出すという文言は、前述の通り、軍団運動の基調であったと同時にルーマニア民族の精神的特性とエリアーデが捉えていたものでもあった。しかしエラノスの講演では、世界の模造や中心のシンボル、天地を貫く上昇のシンボリズムなどをはじめとする古来の宗教的象徴の意味は、深層心理学の助けをかりながら中央アジアやシベリア地方のシャーマニズム、インドのヨーガ、オリエントの神話、ヨーロッパの民間伝承など、時代地域横断的な事例を分析することによって読み解くことができると主張している。IAHR アムステルダム大会での発表と同様にエラノス会議におけるこの講演も、戦前ルーマニアの Nation に直結させていた特性を、国際組織に向けて語り直すことで宗教の普遍的叙述を試みたものと考えられるのではないだろうか。

（3）エヴォラとの決別

大戦間期ナショナリズムから意識的に離れ、自身の学問を戦後の国際秩序に沿う言論に組み替えようとするエリアーデに対し、ユリウス・エヴォラは、古来の神秘思想を捨てて近代世界に迎合しようとしているとエリアーデを責める書簡をおくるようになった。IAHR アムステルダム大会やエラノス会議での講演があった翌年 12 月 15 日付のエヴォラのエリアーデ宛て書簡では、エリアーデが戦後になってからエヴォラやゲノンを著作に引用しなくなったことを責め、『宗教学概論』ではペッタッツォーニを幾度も引用しているのに対してゲノンやエヴォラを引用していないと指摘し、偏狭な公的な学問という制約に捉われてしまっているのではないかと非難する記述が見て取れる[24]。

さらに 1954 年刊行のエリアーデ『ヨーガ 不死と自由』に関するエヴォラの批評が雑誌 *East and West* に掲載された[25]。周知のように本書はヨーガの歴史的展開に関する宗教史学的研究であるが、北アジアのシャーマニズムがチベット、モンゴルを経てヨーガに

Eranos Jahrbuch 1950, Band 19, ss.247-282. 『イメージとシンボル』せりか書房、1974 年、37-76 頁。

[24] J. Evola, 2011, pp. 40-44. Liviu Bordaş,2011.

[25] J. Evola, “Yoga, immortality and freedom”, *East and West*, Rome, VI, no.3, October, 1955, pp. 224-230.

影響を及ぼした可能性や錬金術、マンダラとの比較検討も試みており、エラノス会議で行なっていた講演内容やユングの錬金術研究を反映した内容であった。それに対しエヴォラの批評は、ヨーガに関するエリアーデの知見は西欧に感化された知識人であったダスグプタのもとで得られたのでなく、エヴォラとゲノンをはじめとするエソテリックな思想に依って得られたものであるにもかかわらず、西欧的な学問として認められることに気を取られて、古代の知識を近代化してしまっていると評し、ユングに代表される「西欧主義者」からの影響を批判するものであった。エヴォラの見地からは、戦後のエリアーデは軍団運動のもとで培った思想を捨て、国際秩序に迎合し、学問を堕落させていると映じていたと考えられる。

書簡の記録によれば、エヴォラとエリアーデは1955年4月に対面したと推測される。その後、両者の書簡は途絶え、60年代に数通交わされるだけとなるため、対談の内容を知ることは困難であるが、大戦間期の思想の捉え方をめぐり、戦後世界に適応しようとするエリアーデとそれを拒んだエヴォラのあいだで深い断絶が生じた可能性が想定される。その後、エヴォラは1963年末に刊行した自叙伝の第10章において、大戦間期ブカレストでコドリャーヌのサークルの一員であったエリアーデと対面したことを記している[26]。それに対してエリアーデは、1964年にはエヴォラとの関係を絶ち、刊行物でも言及することがなくなっていった。

エヴォラとエリアーデの関係について、ヨアン・ペトル・クリアーヌは、両者は近代世界を退廃したものと見做し、それを修復するため古代の知識を復興する必要性を訴えた点において共通しており、両者を伝統主義者と捉えることは可能であるが、エリアーデはユングをはじめとするアカデミックな領域に受け入れられる術を身につけていた点がエヴォラとは異なっていたと評している[27]。ユングをアカデミックと見做すか否かについては諸説あろうが、戦後世界においてエリアーデが大戦間期のナショナリズム的な思想を語り直し、エヴォラから離反していったことを端的にあらわした評価と言える。

---

[26] Julius Evola, *Il Cammino del cinabro*, Edizioni Mediterranee, 2014, p. 292. エリアーデと軍団運動の関係について、1970年代になると、ミハイル・セバスティアンの日記を引用しながら告発した記事がイスラエルの雑誌『トラドート』に掲載され、ゲルショム・ショーレムがそれについて追求をはじめたことは周知のとおりである。イタリアではフーリオ・イェージらがエリアーデをエヴォラ主義者でファシストであるという批判を繰り広げることになり、その発端や経緯に関してクリアーヌはエリアーデに詳細に説明していた。『エリアーデ＝クリアーヌ往復書簡 1972-1986年』慶應義塾大学出版会、2015年を参照。

[27] I. P. Culianu, *Studii româneşti, I*, Polirom, 2006, pp. 230-267.

４．小結

以上、大戦間期から第二次世界大戦後に至るまでのエリアーデの言論を、Nation や国際組織創設とのかかわりに着目しながら辿ってきた。大戦間期に、他国からの侵略に抗しながらルーマニアを Nation として統合することを自らの、自分たちの世代にかせられた課題として認識していたエリアーデにとって、国家を防衛するために命を落としていった戦死者を追悼するための宗教としてルーマニア正教を再編することは最重要で取り組むべき事柄であり、そのための手段として宗教学をルーマニアにおいて形成しようとしたのではないかと考えられる。しかし正教を再編するための道を軍団に見出そうとしたこと、さらに Nation のあり方と学問を直結させたことは「ファシズム」に加担したと批判されるに至った。戦後の亡命者向けの言論活動においても、エリアーデが反共産主義的なナショナリズムを保持していたことは周知の通りである。共産主義との闘争においてナショナリズム的言論を武器とすることを選んだエリアーデにとって、軍団運動のイデオロギーを完全に手放すことは困難であり、そのことはエヴォラとの不安定ながらも 1960 年代に至るまで継続した関係性にも反映されていたと考えられる。軍団運動について公的には沈黙するほかないとクリアーヌに伝えていたエリアーデにとって、IAHR、さらに戦後エラノスは、エヴォラに代表される大戦間期ナショナリズム的な言論を抑圧しながらも、Nation を超えて普遍性を志向する宗教現象学としてそれを再構成するための場所であり、宗教現象学はエヴォラ的な記憶を抑圧し、それを昇華することで生じてきたものであったと考えられる。

ポストコロニアル研究の流行などを経た現在、宗教を普遍的に語り得るという思考は近代の生み出した虚構として捉えることが定説となっている。近年の宗教概念論争において、エリアーデ宗教学の志向する普遍性が厳しい批判にさらされてきたことも記憶に新しい。しかし本稿で辿ってきたように、エリアーデの学問は個の研究者の力では制御できない歴史の内で、時代に対して応答しようとする試みとして形成されてきたものであり、エリアーデの志向した普遍性は自身の、さらにルーマニアの過去に対する応答と言えるものであった。ふたつの世界大戦の渦中では生み出し得なかったあたらしい価値として、Nation に捉われずに普遍性を志向し得る学問を形成することが亡命後のエリアーデが取り組んだ課題であったと言えよう。このことは、エリアーデに留まらず、ペッタッツォーニやエラノスに集った研究者たちが共有したものであったのではないか。宗教を普遍的に叙述するという、エリアーデをはじめとする宗教現象学者たちが抱いた欲望を、過去との連関の内に、より詳細に分析していくことは今後取り組むべき課題とし

たい。

キーワード

宗教現象学、ナショナリズム、IAHR、エラノス会議

Keywords

Phenomenology of religion, Nationalism, IAHR, Eranos